



日本植物病理学会ニュース 第48号

(2009年11月)

【本学会活動状況】

1. 部会開催報告

(1) 関東部会

平成21年度日本植物病理学会関東部会は9月10日(木)、11日(金)の2日間にわたり、昨年に引き続き日本大学生物資源科学部湘南キャンパス(神奈川県藤沢市)で開催された。参加者数は名誉・永年会員2名、一般会員120名、学生会員82名の計204名であった。講演題数は40題で、その内訳はウイルス病9題、細菌病6題、糸状菌病12題、防除関係10題、遺伝子発現・宿主の防御機構等3題で、活発な質疑応答が行なわれた。今年度は特別講演を計画し、宇都宮大学の夏秋知英先生を座長として、東京大学大学院農学生命科学研究科・植物医科学研究室の難波成任先生に「植物医科学のめざすもの」、農研機構中央農業総合研究センターの花田 薫先生に「キュウリモザイクウイルスの特性とその防除」の演題で講演いただいた。非常に興味深い内容の講演をしていただき、好評であった。また、東京大学の難波先生から、これまで我が国では発生の報告がなかった *Plum pox virus* (PPV) が青梅市のウメから初めて検出されたことが報告され、学会の受付で東京大学とニッポンジーン(株)が共同開発したPPVのLAMP法とイムノクロマト法による検出キットを展示していただき、実際の診断法を体験していただいた。

開催初日の昼の休憩時間に役員会が開かれ、平成22年度の関東部会部会長の選出について話し合いが行なわれた結果、茨城大学の阿久津先生に引き受けていただくことが承認された。また、2年後の関東地域での全国大会の開催、学会創立100周年記念事業について意見交換がされた。初日の夕刻には昨年度と別の会場である本館地下のレストランで懇親会が行なわれ、会員相互の親睦が大いに深められた。

昨年度は他の研究集会と競合して土日に開催したため、学内の食堂、コンビニ等が閉店しており参加者にご迷惑をかけたが、今年度は平日であり学内の様々な施設を利用していただいた。

日大湘南キャンパスは小田急江ノ島線六会日大前駅から徒歩3分のところにあり、東京、新宿からの所要時間は約1時間で交通の便が良いこと、キャンパス内に視聴覚設備の整った500名収容の大講堂、専用の懇親会場を所有しており、参加者からは好評を得ることができた。部会開催にあたりご協力いただいた座長、会員諸氏に感謝申し上げる。今年度の開催に当たっては植物病理学研究室の井村喜之専任講師、約40名の学生諸君に全面的に協力いただいた。来年度の部会は茨城県にて開催されるが、多くの方が参加されることを切望する次第である。(前田孚憲)

(2) 東北部会

平成21年度東北部会は、9月29日、30日の2日間にわたって、宮城大学食産業学部多目的ホールを会場に開催され、例年より多い90名の参加者があった。26題の講演があり、活発な討論が行われた。講演の内訳は、ウイルス・ウイロイド病13題、糸状菌病10題、その他3題であった。29日の講演終了後に、仙台市中心部のイタリアンレストラン「プレアハウス」にバス2台で移動し、盛大な懇親会が催された。

東北部会では一昨年度から、東北農業の発展に貢献した部会員を表彰する目的で東北部会「地域貢献賞」を設立し、部会幹事会において最終選考を行っている。平成21年度地域貢献賞は、元岩手県農業研究センター 仲谷房治氏「セイヨウナシ胴枯病の発生生態の解明と防除法の確立」に決定した。30日の総会において授与式を執り行い、賞状および記念品を授与した。

平成22年度の東北部会長選挙の結果、次期会長に弘前大学農学生命科学部佐野輝男氏が再任された。平成22年度の東北部会開催は福島県内で開催されることになり、開催地幹事として、東北農研センター 門田育生氏が担当することが承認された。(本藏良三)

2. 研究会開催報告

(1) 第45回感染生理談話会

平成21年度の植物感染生理談話会は「植物-病原体相互作用の理解に基づく病害制御の新視点」をテーマに、8月6日(木)~8日(土)の2泊3日のスケジュールで、北海道七飯町の「大沼国際セミナーハウス」にて開催された。参加者の総数は、66名であった。今回の演題は、第1部「病原性と共生」、第2部「宿主特異性と病原多様性」そして第3部「抵抗性遺伝子と病害制御」の3部構成とし、植物病理学をプラットフォームとしない異分野の研究者にも多数参加していただき、活発な意見交換の場になった。

第1部では、糸状菌や細菌と植物との共生について、その巧みな分子作用機構に関する興味深い研究が紹介された。すなわち、(1)クオラムセンシングによる植物病原細菌の制御機構、(2)まだ未発見の菌根菌に感染しているマイコウイルス分離の試み、そして(3)植物に役に立っていない菌根菌(チーター)とリン酸土壌との関係、(4)植物とウイルスの共生である弱毒ウイルス感染によるウイルス防除の試み、そして(5)非病原菌が植物病原菌に及ぼす巧みな拮抗メカニズムなどの話題が提供された。第2部では、病原体(ウイルスと糸状菌)の多様性について3題の講演があり、(1)系統進化的手法による祖先ウイルスの興味深い探索、(2)幾何学的に美しいうどんこ病菌の分類学の妙、そして(3)弱毒ウイルスの病原性とウイルス分布に関する解析などが紹介された。第3部では、抵抗性遺伝子に焦点を当て、(1)メロンつる割病菌に対するメロンの抵抗性育種の実際と(2)線虫に対するトマトの抵抗性の性状解析に関して興味深い話題提供をいただいた。また、特別講演では、北海道大学大学院水産科学研究院の一色賢司先生に、「食品安全のためのリスク分析とフードチェーン対策」というテーマで話題提供いただき、食品の安全に関するリスク管理の重要性について認識を新たにした。植物病理の分野においてもカビ毒などの問題は深刻な研究テーマであり、どのような取り組み方をすべきか大いに勉強になるものであった。若手研究者の討論を後押しするために行われているポスター発表も学生さんを中心に15題の発表があり、学生2名(北海道大学農学院の末田香恵さんと藤原綾香さん)が最終日に投票によって表彰された。

感染生理談話会は「夏の学校」と呼ばれリゾート地で毎年開催されるために、リラックスした雰囲気の中、若手研究者が自由に意見を交換する場として重要な役割を果たしてきた。ただ、今回のような地方で開催する場合、不況などの影響により、出張旅費の工面など現実的な問題が生じてくるため参加人数が伸びず、頭の痛い面もある。来年度

の開催を九州部会(大島一里部会長)に担当していただくことが了承されて閉幕した。(増田 税)

(2) 第6回植物病害診断教育プログラム

第6回植物病害診断教育プログラムは、8月17日から21日の5日間、岐阜大学応用生物科学部において開催された。前年に引き続き、募集枠を非会員に拡大した結果、全国から定員の25名を超える30名の受講生を集めることができた。そのうち、学会員は20名、非会員は9名、学生会員が1名であった。参加者の内訳は、国・県の試験研究機関から18名、種苗・農薬会社など民間から8名、大学から3名(大学院生1名)、財団から1名であった。

5月に予定されていた日本菌学会が新型インフルエンザの影響で、丁度教育プログラムの後半に重なる時期に延期になったため、菌学会参加予定の講師の先生の講習を先にするなど、一部プログラムを変更する必要があったものの、プログラム自体は順調に終えることができた。また、プログラムの開催前には台風や地震の災害に見舞われ、参加者全員が参加できるかどうか不安があったが、無事全員が参加された。開催期間中は天候に恵まれ、また、岐阜特有の異常高温にもならず、快適に過ごすことができた。

東海地区には、特色のある研究に従事しておられる先生方が多く、プログラムの作成は割と楽に行うことができた。実習は、「作物病害の診断・同定」(外側正之)、「樹木病害の診断と同定」(伊藤進一郎)、「菌類病(うどんこ病)の診断と同定」(高松進・佐藤幸生)、「菌類病(ピシウム病)の診断・同定」(景山幸二)、「ウイルス病の診断・同定」(福田至朗)、「芝草病害の診断・同定」(早川敏広)、「菌類病(フザリウム病)の診断・同定」(須賀晴久)、「植物病原細菌の分離と同定」(瀧川雄一・平田久笑)、「菌類病(リゾクトニア病)の診断・同定」(稲垣公治・百町満朗)、「病害抵抗性の評価法」(川北一人・竹本大吾)という幅広い病害をカバーした内容で実施した。

プログラム4日目の夜には、1300年の歴史を誇る岐阜長良川の鵜飼を楽しんだ。貸切船のモーターの調子が悪く、途中で船を取り換えるというハプニングがあったものの、篝火の下で12羽の鵜を巧みに操る鵜匠の技や魚捕りに励む健気な鵜の姿は、印象深い思い出として参加者の脳裏に刻まれたものと思われる。

終了後のアンケートでは、ほとんどの受講者から、非常に有意義な5日間だったと大変喜んでいただいたものが多く、また、周到的な準備で講習していただいた先生方への感謝で溢れていた。主催者側として、このような受講者の反応に胸を撫で下ろすことができた。プログラムが実習中心だったのと、病害の実物を多く観察できたのが良かったも

のと思われるが、何よりも講師の先生方が、受講者からのいろいろな質問に対し、親切丁寧に対応して下さったことが好印象に繋がったと考えている。受講生からは、今後も、このようなプログラムを続けてほしいとか、野菜病害、花き病害、イネ病害……といった対象を特化した中級編のプログラムを期待する、という意見も多くあった。5日間の講習で、参加者同士の交流も深まり、今後の彼らの仕事に、この教育プログラムで得た経験や交流の輪を有効に生かして欲しいと願っている。

なお、受講生から今回のプログラムへの要望として、以下の3点が出されている。1点目は、講師の先生方が説明に用いたPDFファイル資料を配布して貰いたかったこと、2点目は、便宜的に30名を5人ずつの6班に分けた班編成を受講生同士の交流がさらに深まるように、プログラムの前半と後半とで分けて欲しかったこと、3点目は、講習の合間に休憩時間を入れてほしかったこと、の3点である。これらに関しては、本プログラムの改善に今後活かして頂きたいと思っている。

今回の教育プログラムの実施に当たっては、伊藤進一郎氏・稲垣公治氏・景山幸二氏・川北一人氏・須賀晴久氏・高松進氏・瀧川雄一氏の皆さんに実行委員としてご尽力いただいた。講師を快くお引きいただいた先生方、プログラムの進行を陰で支えて下さった多くの学生諸氏に感謝する次第である。
(百町満朗)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒170-8484 東京都豊島区駒込 1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

加来久敏、築尾嘉章、桑田 茂、植草秀敏、佐藤 衛
各委員宛

編集後記

学会ニュース第48号をお送りします。本号では部会開催報告、感染生理談話会及び植物病害診断教育プログラム研究会開催報告といった学会活動の報告です。部会は関東及び東北部会の開催報告ですが、さらに北海道、関西、北海道そして九州と続きます。各部会とも特別講演や若手の会など各部会の特色を出す動きが注目されます。そのような工夫にもかかわらず研究会や談話会も含めて研究会における参加者の減少は感染生理談話会でも問題として挙げられていますが、大きな問題となっています。不況の影響は底深いものがありますが、早く「食の安全」などを目標とした日本の農業の活性化が待ち望まれます。このように多くの問題を抱えてはいますが、活発な学会活動が目白押しで、主催者の皆様方のご尽力に心から感謝申し上げる次第です。この学会ニュースは「身近な情報を気軽に交換する」をモットーにしております。どうか有益な情報をどんどん発信していただきたいと考えております。迷われた際はお近くの編集委員にお気軽にご相談下さい。
(加来久敏)
